

内部被ばく検診結果報告の相互行為における身体性と発話

——医療場面におけるケア実践の相互行為分析——

立教大学

須永将史

1 目的

この報告の目的は、病院の診察室において、放射線内部被ばく検査の検査結果を医師が患者に報告する場面の相互行為の構造を明らかにすることを目的としている。東日本大震災とそれに続く福島県第一原子力発電所の炉心溶融以降、多くの人々が、自身の健康に不安を抱えながら生活している。こうした状況についてはたとえば、とくに福島県内の人々に対しては、家庭医療制度などを充実させるなどの制度面だけでなくによりも患者の意思を十全に反映する医療ケアを医師がおこなうこともまた必要であるといわれている(葛西 2013)。また、近年、医療コミュニケーションを経験的研究の対象とすることが求められ、プライマリ・ケア場面など主題に着実に知見が積み重ねられている(Heritage & Maynard eds 2006)。本報告では、以上のような背景を踏まえ、医師が患者に甲状腺の検査結果を伝えるという相互行為に焦点を向ける。とりわけ、医師は患者に理解や共感を示すこと、すなわち広義における「ケア」をどのようなふるまいや「表現(とりわけ、言語による)」によって達成しているのかを経験的に明らかにする。また、「専門家」としての医師が「素人」としての患者に対し、専門的知識をどのように伝え、患者がそれを理解してゆくのか、そのためにどのようなふるまいが用いられているのかを明らかにしたい。

2 方法

そこで、実際に検査を行っている病院に赴き参与観察を行なった。また、参与観察を行ないながら、診察場面の実践場面をビデオカメラまたは IC レコーダーを用いて収録した。収録されたデータは、基本的には会話分析の手法によって分析する。すなわち、発話やふるまいを丁寧に転写(トランスクリプト)し、そこに参加者が何をどのように志向しているのかを記述していく。注目するのは、上に述べた「ケア」を達成するための発話やふるまいと、それがいかに専門性と結びついているのかという点である。また、まさに患者の身体そのものが相互行為において重要な主題となる場合が多いため、図などを駆使し、相互行為における身体性も視野に入れる(西阪 2008)。

3 結果および結論

分析の結果、医師が、「発話」や「ふるまい」によってどのように患者に「ケア」することを達成しているのかが明らかになる。とりわけ医師が、頭部の「模型」を使って甲状腺に「問題がないこと」を説明しているときに、しばしば「発話の重なり」が起こることが見いだされた。頭部の模型は、患者の身体の部分的なモデルということができるが、それはまさに現在進行している相互行為において主要な焦点となっている身体の部位である。本発表では、「模型」が使用されながら説明が進行するプロセスにおいて、その間のやり取りを「患者が理解すること」が医師にとって重要であり、そしてその間におきる「発話の重なり」が相互行為的に意味あるものであることが結果として述べられる。さらに、以上の結果が参加者および分析者にとってどのような意義があるのかの結論は当日述べる。

文献

Heritage, J. & Maynard, D. W. 2006. *Communication in Medical Care*. Cambridge University Press. Cambridge: M.A.

葛西龍樹, 2013, 『医療大転換—日本のプライマリ・ケア革命』筑摩書房。

西阪仰, 2008, 『分散する身体』勁草書房。